

「ワープロ文書を作成しよう」

1 単元の学習

単元目標

- 自分の視力に応じたコンピュータの環境設定ができる。
- ローマ字入力でタッチアンドタイピングができる。
- 視覚障害者用音声ソフトウェアを利用して、文書を完成させる。
- ワープロソフトウェアの「書式」と「表作成」機能を使い、ワープロ検定4級合格のための力を身に付ける。

対応する学習指導要領の内容

教科・領域等	内容等
自立活動	・コンピュータによる情報処理に関すること。

2 指導略案

単元指導計画

指導内容等	時間
アカウントを作成し、自分の見え方に応じた環境設定をしよう	1時間
ローマ字入力でタッチアンドタイピングをしよう	4時間
ショートカットキーを使って、文書を校正しよう	2時間
「書式」と「表作成」の機能を使って、ワープロ検定4級に合格できる文書を作成しよう	(本時)4時間

本時の目標と展開

【目標】

- メニューバーの「書式」を使って文章の体裁を整えることができる。
- 印刷プレビューで文書のバランスを確認することができる。

【展開】

学習活動	教師の働きかけと指導上の留意点(情報機器・教材の活用)
本時の学習内容を確認する。	メニューバーの「書式」を使う意欲を持たせる。 ・すべて左揃えの文書とメニューバーの「書式」を利用した手本文書を比較させ、書式体裁を整える必要性を確認する。
さまざまなメニューバーの「書式」を利用する。	必要な箇所を範囲設定し必要なメニューバーの「書式」を設定させる。 ・音声情報から必要なキー操作を実行する。 ・操作方法のメモを取る。 ア) Shift+矢印キーで必要な箇所を範囲選択 イ) Alt「メニューバー」 右矢印キー 「書式」Enter 下矢印 必要な「書式」を選択
ダイアログボックス内をキー操作で移動する。	シート・ボックス・ボタンの移動方法を理解させる。 ・音声情報から必要なキー操作を実行する。 ・操作方法のメモを取る。 ア) 作業シート間の移動：左右矢印キー イ) ボックス間の移動：Tabキー ウ)「リストビュー」の選択：上下矢印キー エ)「ラジオボタン」の選択：左右矢印キー オ) 逆戻り移動：Shift+Tabキー
印刷プレビューでバランスを確認する。	ズームの倍率を調整して全体のバランスを確認させる。 Alt「ファイル」 下矢印キー 「印刷プレビュー」 Alt「メニューバー」 右矢印キー 「表示」Enter 下矢印キー 「ズーム」 Tabキー「指定」 上下矢印キーでズームの決定 Enter 表の挿入文書を見せ、次時の表作成への意欲をもたせる。

3 展開の実際

【対象学年・児童生徒】

高等部普通科1年・近見視力0.2の女子

【学習の流れ】

視覚障害者が、自己の見え方を理解し、対応を工夫すれば、見えやすい状況を作ることができることを十分に理解する必要がある。

学校用のコンピュータは複数の生徒が使用するため、自分のアカウントを作成して自分の見え方に合わせた設定を行う。

スタートメニュー プログラム アクセサリ ユーザー補助
ユーザー補助の設定ウィザード

視覚障害者用読み上げソフトウェアを自分に合わせて設定し、画面の文字や漢字変換の正誤を判断する。

画面表示と音声によるコンピュータ操作が可能なことを理解する。

キーによる操作が主体であるため、ローマ字によるタッチアンドタイピングが必要となる。

ショートカットキーやアプリケーションソフトウェアのツールの利用方法を理解する。

基本のアプリケーションソフトウェアの利用に慣れる。

情報機器の利用によって、職域が広がる可能性を知る。



【生徒の様子】

音声読み上げソフトウェアは、コンピュータから声が出る、画面が見やすい、自力で操作できることなどから、自学方法が広がり、すべての生徒が喜んで意欲的に学習に取り組むようになった。

4 情報機器等の活用の工夫

【視覚障害者用ソフトウェア等の活用】

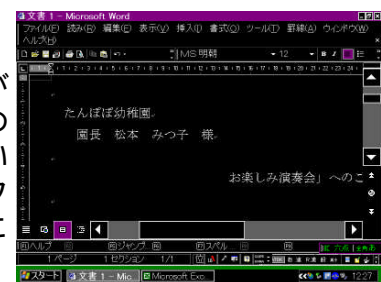
視覚障害の児童生徒は、かつて情報入手が非常に困難であったが、情報機器の普及・充実によって自力で情報受信および発信の可能性が広がった。情報機器の活用は、特に視覚障害者においては欠くことのできない生活ツールとなっている。また、一人ひとりの見え方の違いに応じて動作環境が設定でき、読み上げソフトウェア、点字変換ソフトウェア、文書読み取り機器、点字データ作成保存機器を駆使することで、視覚障害がない人と同程度の学習・作業が可能となる。

【自作教材の開発・作成】

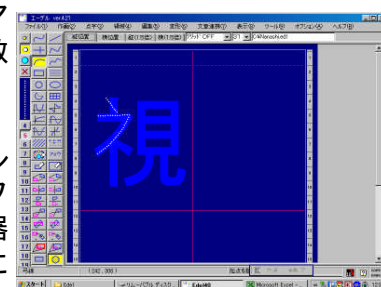
点字化のための「お点ちゃん」「エーデル」等のフリーソフトウェアを使うことで、弱視・全盲生徒がともに学ぶグループにおいても、教材を同時に提示することができる。

【「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」への位置付け】

「情報チェックリスト」を作成し、「個別の指導計画」のファイルとともに毎年引き継いでいる。コンピュータやワープロ・表計算ソフトウェア等の基本アプリケーションソフトウェアの操作等の情報機器活用スキルの獲得状況が担当者に理解できるようになっている。特に自立活動において、視機能・歩行と同様に重要項目に位置付けている。



白黒反転・ズームアップ画面



「エーデル」作業画面

5 情報機器等の活用の効果

【視覚障害者用ソフトウェア等の活用の成果・メリット】

情報を自力で作成し送受信するスキルを身に付けることは、視覚障害児の児童生徒にとってコミュニケーションおよび職域の広がりにつながり、ワープロ検定受験を目標に正確なキータッチを心がけた結果、4級の検定資格を得ることができた。文字入力速度は10分で300字程度と確実に向上しているため、3級の取得とともに表計算ソフトウェアの操作技術の習得を希望している。表計算ソフトウェアについても、ショートカットキーの活用や、視覚障害者ソフトウェアの導入によって、全盲の児童生徒にも操作できるため、資格取得をクラス生徒全員が希望するよい動機付けとなった。

【改善・工夫を必要とする点】

生徒の多くは漢字の変換を読み上げ音声によって判断する。最も効率のよい変換の仕方の研究が課題である。また、効率的なインターネット活用の研究を早急に行い、情報格差をさらに解消していくことや、「情報チェックリスト」の内容や様式を検討し、より使いやすいものにしていく必要がある。